
推薦文

映画監督、女子美術大学教授

元NHKエグゼクティブプロデューサー

河邑 厚徳

(かわむら・あつのり)

皆さんは衛星から捉えた「青い地球」をいつでも目に浮かべることができると思います。私がいしET（地球外知的生命）に地球を紹介することになれば、この衛星写真と並んで、太平洋の深海、森林、砂漠、沃野からヒマラヤの頂きまでの多様な自然、175万種を超える地球上の生き物たちを見せます。その上で、人間とは何かをどう伝えられるか。文学や音楽も考えましたが理解されない可能性もあります。ETの音楽を地球人である私たちが楽しめる保証はありません。そう考え、ETにプレゼントしたいのがこの一冊です。

人が人である証は動物と違い新しい形や繋がりを作り出せる事です。ミツバチは何万年も同じ六角型の巣を作ってきました。人間だけが五角形や全く違う形を考え造り上げる存在です。人類の豊かな創造力が都市と景観を作り、生活の舞台としてきたのです。また人類は目に見えない神や永遠性を神殿などの形で象徴してきました。俗から聖なるものまで、

まえがき

東京学芸大学名誉教授

伊藤 清忠

(いとう・きよただ)

私の海外への旅は、1950年中学1年の春に始まった。「世界美術全集（全30巻）」（平凡社）に目を通し、欧米に憧れ、中国を尊敬し、朝鮮に親近感を持つ、驚きと喜びの出発だった。テレビ放送が始まる前のことである。

高校2年の冬、インダストリアルデザインを知り、デザインの勉強を始めた。海外への興味はさらに増幅し、1956年上映の「八十日間世界一周」を何回も観た。環境デザイン、景観デザインが大学に開設されたのは20年後である。

東京芸術大学入学後は、海外の街並・集落、建築などを観るため頻繁に映画館に通った。学部、大学院の春と夏の休暇に2～3週間、復帰以前の沖縄以外の全都道府県に、街並・集落、民家、土木施設、神社仏閣、博物館、美術館、工業試験所、民芸産地などを200日間以上巡った。

一般人の海外渡航が自由化されて間もない1970年、99日間のヨーロッパ・中近東・アフリカ15カ国の旅に出たのは必然のことだった。ガイドブックは

その土地の環境や歴史が生み出した造形の豊かさはETの心にも届くはずです。

この本は、伊藤清忠氏のロマンチズムから生まれました。1937年生まれの伊藤氏は東京芸術大学でデザインを学ぶ中で、異国の形象に憧れ続けました。想像を超える形を生み出した異民族の心にも触れたいと考えていました。まだ自由に海外への旅行は出来ない時代、外国映画に夢中になったのは、スクリーンで見る異国の風景や街を見るためでした。卒業後、伊藤氏は初めて羽田から国際線の旅に出ます。当時は一ドルが360円、外国旅行は特別の覚悟がいりました。翌1970年には、ヨーロッパ15カ国、99日間の撮影、続いてアメリカ4カ国、98日間の撮影に出かけています。伊藤氏は、両親に相続遺産の前倒しを説き伏せて旅行費用に当てたといいます。映画「八十日間世界一周」を繰り返し見ながら、いつか自分の足で世界に立ちたいと夢見ました。以来半世紀を超える伊藤氏の旅に欠かせないのがカメラ

です。自分の目で切り取った被写体に感激しながらシャッターを押す。その一枚一枚が7万5千枚にも達しています。大旅行家となった伊藤氏の精髓がこの一冊に詰まっています。

人間は豊かな創造の才能に恵まれているにもかかわらず、実に愚かにその遺産を破壊してきました。創造と破壊、光と影、その中で伊藤氏は光だけを見つめてきました。私はNHKで「世界遺産」をユネスコと協力し高画質映像で記録する事業を進めました。世界遺産の思想は、伊藤氏の情熱と重なっています。視界ゼロの時代、私たちは普遍的な価値を持つ本物を求めます。この本には伊藤氏が撮影した129件の世界遺産からも多くの写真が選定されています。興味深いのは、その中の105件は伊藤氏が遺産登録の前に訪れていることです。美を求める巡礼者である伊藤清忠を、ユネスコ世界遺産が追いかけてきたようです。伊藤氏の自由な選択眼も、この本の楽しみです。

おろか情報も少なく、「世界遺産」の概念もなかったが、長年かけて周到な準備をしていたので、海外渡航の喜びでさして不安を感じなかった。1972年にユネスコ総会で世界遺産条約が採択されたが、日本が批准したのは1992年である。

一つの言語で「以心伝心」の日本から飛び込んだカルチャーショックは大きく、民族や国による表現の多様性に対峙し、美しさと迫力に驚き感動し、ときには熱中症で倒れるまでシャッターを切り続けた。

荘厳なゴシック建築の迫力。礼拝を呼びかけるアザーンの響きを天空に舞上げるタイルの輝き。インド、エローラの玄武岩を100年以上費やし掘り下げ彫り出した、カイラーサナータ寺院の底知れない人間の執念。

現在、世界遺産の登録数やガイドブックがヨーロッパに偏重しているが、中国、インド、メキシコ、ペルーなどの世界遺産に相応しい地域や施設も発掘し撮影した。その結果、訪ねた世界遺産129件

の内、105件は登録以前である。

1985年ごろまでは欧米人以外の観光客は非常に少なく不便な点多かったが、土産物店や観光客の心ない振る舞いも少なかった。現在は観光地化した世界遺産には、観光客や土産物店があふれ、保全のための入場制限などがあり、本来の景観を撮影できなくなった。民族衣装の人々でにぎわうチベットの大昭寺、信者の熱気あふれるインドのパナールスの沐浴場、荘厳なメキシコのチチェン・イツァ遺跡などは貴重な写真と言えよう。

この書籍を手にするにより、気候・風土・歴史の違いが人類にこれ程までに異なる建造物を造らせることへの驚きと、未知なる人間の可能性への期待をお分かりいただけることと思う。

約900点の写真を厳選し掲載したが、旅の参考に、まちづくりに、何より我々人類の英知と美意識の再認識にお役に立ていただければ幸いです。





ヤン ドン
良 洞 Yangdong

韓 国 Republic of Korea

韓国南東部、慶州の北 25 km、慶尚北道月城郡江東面良洞に位置する。16 世紀以降、150 戸の李朝特権階級両班の同姓集落。月城孫氏系と驪江李氏系両班の住居が、儒教的な秩序に基づき、南面する傾斜地の斜面上に両班住居（瓦葺）は高所に位置し、下方に下人の住居（草葺）が配置される。木・草・土・石・瓦の素材感と素材色により自然と一体化している。2010 年世界遺産（文化遺産）に登録。

【写真】 1. 中央部を見下ろす 2. 秀麗なデザインの香壇 3. 周囲の自然と一体化 4. 香壇の舎廊棟・男の空間 5. 香壇の行脚棟 （1997年撮影）





ジャーミ・マスジド

Jami Masjid

インド

Republic of India

インド北部、デリー旧市街、ムガル朝シャー・ジャハン帝により1658年に創建された。9 mの丘上に回廊内100 m角の中庭、球根型3ドーム、2基の高さ39 mのミナレットを白大理石と赤砂岩で表現したインド最大規模のモスクである。この地域は1857年のセボイの反乱ではイギリス軍との激戦場となった。ミナレットの上からは市街を一望できる。門前に店舗・屋台が密集したデリーのランドマークとなっている。

【写真】 1. 丘上の東門・回廊 2. ミナレットから東門・回廊・門前街を見下ろす（1984年撮影）

【ヨーロッパ】





アルベロベッロ Alberobello

イタリア Italian Republic

イタリア南東部、プーリア州、標高 400 m に位置する、円錐形屋根付組積造単層の極めてユニークな住居（トゥルッリ）群。16 世紀に成立した農村集落で、地場産石灰石のみの暗い灰色屋根・漆喰壁・1 部屋 1 屋根（1 世帯数部屋）。円錐形屋根は、家屋税を逃れるため屋根を壊して家屋ではないと言い逃れるためとか。屋根の雨水導入口から地下の井戸に貯水する。1 030 のトゥルッリのリオーネ・モンティ地区（商業地区）と、400 のトゥルッリのアイア・ピッコラ地区（住居地区）があり、商業地区は土産物屋が多く観光地化されている。1996 年世界遺産（文化遺産）に登録。

【写真】 1. リオーネ・モンティ地区を望む 2. 円錐形屋根と漆喰白壁 3. 4. アイア・ピッコラ地区 5. リオーネ・モンティ地区の石畳街路 6. トゥルッリの変形屋根 7. 奥まった入口前にベンチ 8. 屋根に換気塔 9. 円錐形ドーム内側 10. 換気塔と雨水導入口 11. 12. 円錐形屋根頂部の装飾・換気塔（1997 年撮影）

【アフリカ】





カナダ

● トロント (p.130)

● ジョンソンワックス (p.137)

● オーク・パーク (p.132)

アメリカ

● ニューヨーク (p.135)

● 現代アメリカの橋梁 (p.138)

● 落水荘 (p.133)

● ウィリアムズバーグ (p.141)

● 現代アメリカの橋梁 (p.138)

● サンタフェ (p.131)

● ウィリアムズ・スクエア (p.136)

● ファウンテン・プレイス
ダラス (p.134)

● IBM総合センター
(p.140)

● 現代アメリカの橋梁 (p.138)

● 現代アメリカの橋梁 (p.138)

● マイアミ (p.142)

メキシコ

● テオティワカン (p.143)

● パックアロ (p.150)

● オアハカ (p.151)

● ミトラ (p.152)

● ウシュマル (p.148)

● パレンケ (p.146)

● チチエン・イツツア (p.144)

キューバ

ハイチ ドミニカ

ジャマイカ

ホンジュラス

ニカラグア

コスタリカ

パナマ

〔北・中央アメリカ〕

〔南アメリカ〕



【海外研究旅行の軌跡】

1969年1月29日～2月5日(13日間)
台湾(浜田庄司、鈴木尚夫ほか)
1970年6月24日～9月30日(99日間)
デンマーク、スウェーデン、イギリス、フランス、スペイン、
スイス、西ドイツ、オーストリア、イタリア、ヴァチカン市国、
ルーマニア、ギリシャ、トルコ、エジプト、イラン(伊藤弘子)
1977年7月24日～10月29日(98日間)
アメリカ、カナダ、メキシコ、グアテマラ(伊藤弘子)
1982年7月29日～8月12日(15日間)
ギリシャ、イタリア、ヴァチカン市国、西ドイツ、フランス
(東京学芸大学卒業生修了生)
1982年11月3日～11月7日(5日間)
香港(中原洋、中原道子、榎本基純、伊藤弘子ほか)
1984年9月1日～11月4日(65日間)
インド(伊藤弘子)
1985年8月16日～10月14日(60日間)
ペルー、ボリビア、ブラジル、アルゼンチン
(文部省在外研究、伊藤弘子)
1989年9月20日～10月21日(32日間)
インドネシア(伊藤弘子)
1990年4月24日～5月9日(16日間)
フランス、ドイツ、スイス、リヒテンシュタイン、オランダ、
オーストリア、デンマーク
(建設省シビックデザイン導入手法研究委員会)
1991年4月20日～5月3日(14日間)
オーストラリア、シンガポール、香港
(建設省シビックデザイン導入手法研究委員会)
1991年10月8日～10月22日(15日間)
トルコ(伊藤弘子)
1993年6月20日～7月4日(15日間)
スペイン、スイス、イタリア、ドイツ(野崎秀則、大江豊、中島巖ほか)
1993年9月26日～10月13日(18日間)
モロッコ(伊藤弘子)
1994年8月6日～8月17日(12日間)
中国(上海、チベット)(伊藤弘子)
1994年8月27日～9月4日(9日間)
シンガポール、香港、中国(上海、蘇州)((株)建設技術研究所)
1994年12月22日～1995年1月1日(11日間)
カンボジア、タイ(伊藤弘子)
1995年6月18日～7月2日(15日間)
ベネズエラ、アメリカ
(鹿島昭治、友寄孝、高楊裕幸、後藤嘉夫、藤原正明ほか)
1995年9月28日～10月15日(18日間)
インド(伊藤弘子)
1995年12月17日～12月31日(15日間)
ネパール(伊藤弘子)
1996年12月15日～1997年1月1日(18日間)
イエメン(伊藤弘子)
1997年6月6日～6月24日(19日間)
イタリア、ヴァチカン市国(伊藤弘子)
1997年10月9日～10月21日(13日間)
韓国(伊藤弘子)

1997年12月28日～1998年1月3日(7日間)
中国(福建省)(伊藤弘子、明日香)
1998年12月19日～1999年1月4日(17日間)
中国(貴州、雲南)(伊藤弘子)



インタビューの様子(左から伊藤、岡村)

●自身が現地で直に体験し、感動し、 そして学ぶことが大切

岡村 先生が長年かけて世界のいろいろな所に行って観てきたものが、今回1冊の本になったわけですが、以前からこのような企画を考えていたと聞きましたが、今のご感想は・・・

伊藤 子供のころに、唱歌「海」の歌詞に「海は広いな 大きいな、月が昇るし日が沈む、海にお船を浮かばして、行ってみたいなよその国」とありますが、原点はそこにあるようです。

国内各地を巡っていた学生のころから、いつかはこのような本を出版したいと願っていました。

以前「東京学芸大学紀要第52集(2000年)」に掲載した「街並・集落の美的表現要素による研究」は、編集の制約があって页数や写真の点数など不満足でしたが、今回は充実した内容となり、願いが叶って大変幸せです。

岡村 今でこそ世界遺産などでよく知られる建造物や自然風景も多いのですが、30年以上前からそれらを観てみようとしたきっかけはどんなことでしたか。

伊藤 他人が撮影した映像や話・文章などではなく、私自身が現地で直に体験し、感動し、景観デザイナーの視点で謙虚に学び、それを評価し、どのように良いか、どのように良くないか、私ならどうするかを現地で考えたからです。講演会や講義で、他人が撮影した映像や話・文章などの受け売りはしたくありませんので。

●訪れた世界遺産129のうち105は登録前 という先進性

岡村 今回出版された写真集は、先生の所有される写真